

# 「イヴリン」を読む

—— 習作期のジェイン・オースティン(5) ——

向 井 秀 忠

## 1

ジェイン・オースティンは習作期の作品を三冊のノートに自分でまとめた  
が、「イヴリン (“Evelyn”)<sup>1)</sup>は、1792年に『第三巻』と題されたものに書き  
写されたとされている。はっきりとした執筆年はわからないものの、おそらく  
は同時期に書かれたものではないかと考えられている。その後、原稿に添えた  
日付をチョウトンに引っ越して間もない時期である1809年に改めたとされる  
が、大きな加筆や修正の形跡はないとされている<sup>2)</sup>。オースティンが習作期の作  
品をまとめた際の収録順は特に執筆順に並べるなどの編集上の意図はなかつた  
ようで、並べ方はかなり恣意的なものとなつてはいるものの、「イヴリン」が  
1792年に書かれたとするならば、この作品は習作期の終わり頃に書かれたこ  
とになる<sup>3)</sup>。同年に書かれたものとして、同じく『第三巻』に収録されている「キャ  
サリン、あるいは東屋 (“Catharine, or the Bower”)<sup>4)</sup>があり、こちらの方が現  
在も研究者の関心を集めている。

「イヴリン」の執筆原稿については、以下のような複雑な事情が指摘されて  
いることを付け加えておきたい。現在、読むことのできる「イヴリン」とい  
う作品には一応の結末がつけられているが、これまでの詳細な原稿研究などか  
ら、この作品はオースティンの手で完結されていない可能性が非常に高いと  
考えられている。オックスフォード大学出版局のワールズ・クラシックス版の  
「イヴリン」は175頁から185頁に収録されているが、確実にオースティンが

書いたと考えられるのは183頁の18行目までで、それ以降については、どうやら別の人物が書き足したものらしいとされている。また、このノートには別紙に書かれた別の結末が挟み込んであり、完成された原稿とは別の結末を読むことができる<sup>4)</sup>。

B. C. サザムが、「イヴリン」と「キャサリン」の原稿の筆跡が途中で変わっていることを根拠に、この二作品の後半部分はオースティン以外の他人の手によって書き足されたものであるとしたのが、この件に関する最も早い時期の指摘であろう<sup>5)</sup>。この点についてのそれ以後の議論に関しては、カナダのアルバータ大学英文科の習作出版局が出した「イヴリン」のテキストに添えられた「テキストについての注釈」に詳しい<sup>6)</sup>。この注釈によると、オースティンのテキストで現在のところの定番となっているオックスフォード版のテキストを編集したR. W. チャップマンは原稿の筆跡の変化については触れておらず、先に上げたようにサザムがそのことを初めて指摘した。ところが、直接に「イヴリン」の原稿をチェックする機会がなかったためか、その後の多くの批評家たちは、この作品は時期をずらしてオースティンが書き続けて完成させたものであるとしてきた。しかし、ドゥーディーがテキストに序文を付けた際には、ディアドリ・ル・フェイの指摘などを踏まえ、オースティンがこの作品を題材に姪アナ・オースティンや甥ジェイムズ・エドワード・オースティンらと小説執筆作法などについて話し合いながら書き足していったのではないかとされるようになった。そして、習作出版局版のテキストの注釈を付けたサポーは、この三人の筆跡をさらに調べることで次のように結論づけている。「イヴリン」の原稿には三つの異なる筆跡が見られ、主に原稿を書いたのがオースティン、それを受けて加えられた結末はジェイムズ・エドワードが1829年に書いたもので、挟み込まれていた別紙の結末はアナによって1814年に書かれたとするのが妥当であるとしている。この議論の真偽については定かではないが、この作品について考えていく際には、結末はオースティン自身によって書かれたものではない可能性の高いことは留意しておく必要があるだろう。

## 2

オースティンの習作期の作品の中でも、「イヴリン」に対する一般の評価は決して高いとは言えない。フランシス・ピアが編んだペンギン版の習作期の作品集には『第三巻』からは未完の作品である「キャサリン」だけが収録されている事実も<sup>7)</sup>、「イヴリン」に対する評価の低さを示すものであると言うことができよう。その理由として、登場人物があまりにも典型的であることや、物語そのものがあまりにも荒唐無稽であることなどが挙げられることは容易に察することができる。こうした指摘について反論する余地はないが、そういう作品の欠点を認めてもなお、オースティンという作家について考える際に、この短い物語には注目すべき点がいくつかあるように思われる。

マーヴィン・マドリックは、「美しさ、寛容さ、そして愛」といった「感傷的な美德」に対するパロディとしてこの作品を読み、それぞれの要素について具体的な箇所を引用しながら指摘している<sup>8)</sup>。また、A. ウォルトン・リッツは、「習作期の作品の中でも最も成熟した作品」として「イヴリン」と「キャサリン」を挙げて高く評価している<sup>9)</sup>。リッツの論はマドリックの指摘を元にして展開され、やはり当時流行していた「感傷小説」に対する批判としてこの作品が書かれたという観点から分析を行い、作中で展開される「一目惚れ、不可解な記憶違い、冷酷な両親、流される涙と気絶」などを「感傷的な小説にお決まりの設定」として挙げているほか、ゴシック小説に対する皮肉的な姿勢をもこの作品から読み取っている<sup>10)</sup>。

それでは、リッツの指摘に従いながら、簡単に物語を確認していきたい。イヴリンの村にやって来た主人公のガウワー氏は、バブの女主人に紹介されたウェット家を訪れた際、長女のマライアを見た途端に一目惚れをして即座に求婚し、家と土地に加えて娘も手に入れる（「長女のウェット嬢を見たとき、ガウワー氏は自分が幸せになるためにはこの家を譲り受けること以上に必要なことがあると感じたのでした」178）。しかし、妻との幸せな生活の中、たまた

ま見かけたバラの花のために、哀れな妹のことを突然に思い出し（「ああ、マライア、この花を見て思い出したぞ。ああ、可哀相な妹よ、どうしてお前のことをすっかり忘れてしまったのだろうか」179）、ようやく、そもそもの自分の旅の目的を思い出すことができる（「イヴリンまでたどり着いた時、——館から何マイルも離れていないところまでやって来てはいたのですが、彼はそこで自分の身に降りかかってきた喜ばしい出来事のため、しばらくの間、自分の旅の目的と不幸な妹のことをすっかり忘れてしまっていたのです」180）。そして、その妹が自分からの便りがないことがショックで亡くなったことを知るが、それでも当初の目的の完遂のため、妹との結婚に反対した一族の屋敷を訪問する。相手の息子もすでに事故で亡くなっており、ガウワー氏の唐突な訪問のため、息子を亡くしたショックから立ち直れない相手の母親の悲しみは甦る（「一令夫人は、自分の息子のことが話題になっていることに耐えられず、泣きながら部屋を出ていきました」182）。ガウワー氏は、死に免じてこの二人の結婚を許して欲しいと頼むが、相手の父親は相も変わらず反対の意を表明したため、彼から見れば冷酷な両親と映ることになる（「あなた様がとても頭の堅いお人だということが良くわかりましたし、ご息子が亡くなられたことさえも、息子さんのこれからの人生が幸福なものになって欲しいと願うきっかけにさえならないということも良くわかりました」182）。得るものが何もなく帰宅した彼は、自宅に妻の姿が見えないことを不審に思うが、召使いたちが妻の着替えの間でお茶を飲んでいるという見慣れない光景を目撃したショックで気を失ってしまう（「彼はいつにないその光景に驚いて気を失ってしまいました…」183）。意識を取り戻した彼は、妻はひとりにされた淋しさのために亡くなったことを召使いから聞くことになる（「ひとりで置いていかれたことを嘆き悲しむあまり、彼が出発してからおよそ三時間後に心を痛めて死んでしまった」183）。妻を亡くしたガウワー氏はカーライルへ帰省し、そこで死んだと知らされていた妹が活着していることに驚き、妹の方は気絶してしまう（「彼の姿を見ると、彼女は気を失ってしまい…」183-84）。

このように、「イヴリン」という作品には、感傷小説の特徴的な要素を茶化すような場面が次々に出てくる。さらに、妹の婚約者の両親の屋敷の場面がゴシック小説のパロディになっていることは、一読すれば読者にわかるように描かれている（「屋敷に通じる曲がりくねった道を進んで行くと、その古く陰鬱な外観が自分のことを睨みつけているように思われ、彼は強い恐怖の念を感じたのでした」181や「馬に乗ってお屋敷の大きな門の外に出て、その門が完全に閉ざされて締め出されてしまうと、人間の本能的な恐怖感が彼の身体に震えを走らせたのです」183など）。こうして見ていくと、「イヴリン」は、感傷小説やゴシック小説などに対するパロディの要素が非常に強い作品であることがよくわかる。

### 3

「イヴリン」が単に感傷小説やゴシック小説のある一面を誇張しただけの作品であれば、これ以上は取り立てて論じる必要はないが、後にオースティンによって書かれる作品から遡りながら考えていくと、この16歳の若書きの中にも特筆すべき特徴のあることがわかってくる。新たなテキストが出版されるたびに新しい注釈が添えられるわけであるが、時にはそれがテキストの新たな読み方を提示してくれることがある。「イヴリン」の場合もその例に漏れることはない。ドゥーディーやサポーらによってテキストに付された注釈の多くは、一見すると些細なものが多いようにも思えるが、そうした細かな説明を理解しながら作品を読み返してみると、作品のイメージそのものが大きく変わってしまうような場合もある。例えば、オースティンが作品の中で何かの固有名詞を使っている場合、たとえそれが何気なく使われているように見えても、実は作品世界の奥行きを深める役割を果たしていることが少なからずあるからだ<sup>1)</sup>。オースティンがそういうタイプの作家であるならば、こうした細かな事柄について正確に理解しながら作品を読んでいくことは非常に大切なこととなる。ここでは、「イヴリン」における次のような三つの場面を取り上げ、オースティ

ンがこれらの言葉を使うことで、語りに膨らみを持たせる効果をいかにもうまく使っているかについて見ていきたい。

まず、主人公のガウワー氏が病気で寝込んでしまった場面で、「痛風(“gout”）」という具体的な病名が使われていることについて考えていきたい。

この手紙から、ガウワー氏は、自分自身が妹の死の原因になってしまったことを認めざるを得ず、そのことは彼の心に非常に大きな打撃を与え、病気というものをほとんど耳にすることのないイヴリンに住んでいながらも、痛風の発作に襲われて自分の部屋で寝込んでしまったので、マライアは、サー・チャールズ・グランディソンの作品に出てくる大好きな登場人物の看護婦の役を生き生きと務める機会を手に入れることになりました。(傍点筆者, 181)

この箇所を読んだところ、彼が部屋で寝込んでしまうことになった理由としては「病気になったために」などの曖昧な表現でも十分のように思えるが、わざわざ「痛風」という具体的な病名を明記していることには当然ながら意味が込められている。ドゥーディーがこの箇所についた注釈は、「若い人や精神的にショックを受けた人が患う典型的な病気ではなく、18世紀の医学の知識においては食べ過ぎや飲み過ぎと結びつけられる、とても非ロマンティックなもので、普通は(少なくとも小説においては)中年の肥満した紳士の疾患である」(334)となっている。ガウワー氏が病気に陥った原因について語り手は妹の死が与えた衝撃と自責の念を挙げているが、彼が「痛風の発作」で寝込んでしまったとはっきりとした病名を付け加えることで、実は語り手の説明が正しくないことが暴露される。つまり、「痛風」が精神的なショックが原因で生じる病気ではないことがわかっている読者には、当然、彼が寝込んでしまったのも妹の死が与えた精神的なショックに因るからではなく、単に彼の行き過ぎた飲み食いによるものであり、彼の食生活が節操のない贅沢なものであったこと

が連想されることとなる。ここに、語り手が直接には語らないことを通して、読者はガウワー氏の人となりの一面を知ることになるのだ。

また、彼の表には出て来ない一面をほのめかす別の例としては、以下に挙げる箇所も効果を発揮している。——館で妹たちの結婚について相手方の父親と議論したものの、自分の要請が呆気なく拒否されたことで頭にきたガウワー氏が怒りに任せて屋敷を飛び出して帰路につくというのが下記の場面である。

ところが、馬に乗ってお屋敷の大きな門の外に出て、その門が完全に閉ざされて締め出されてしまうと、人間の本能的な恐怖感が彼の身体に震えを走らせたのです。もし私たちが、彼の置かれている次のような状況を理解することができれば、いったい誰が彼に同情しないでいられるでしょうか。たった独りきりで、馬に乗り、一年の中でも八月という月の、一日の中でも夜の九時という時刻に、満月の月明かりとちらちらと瞬いて警告を発してくれる星の他には道を行く助けとなる明かりはほとんどないという状況なのです。四分の一マイルの範囲には一軒の家もなく、胡桃と松の木に覆われて黒っぽく見える陰鬱なお城が後ろにはそびえ立っていました。極度の恐ろしさのあまり彼は気が狂わんばかりに取り乱しそうになったほどで、ジプシーと亡霊のどちらも目にしないようにと、村に帰り着くまでの道のりを目をつむったまま馬を全速力で走らせたのでした。(傍点筆者, 183)

上の文章がゴシック小説を揶揄したものであることは明白であるが、この箇所について、ドゥーディーは「本当は遅くも寒くもない。夜の九時に外出することはまったく大したことはないし、その道のりも絶えず満月の明かりによって導かれているのである」(345)といった注釈を付けている。確かに、イギリスの夏を経験したことがあれば実感することであるが、夏期の日照時間は非常に長く、八月であれば午後九時というのはまだ十分に明るく、決して恐怖

を感じさせるような時間帯ではないことが思い出されるであろう。また、この箇所をじっくりと読めば気づくことであるが、「四分の一マイルの範囲には一軒の家もなく」というところも、計算して考えてみれば、四百メートルくらい先には家があることになり、この点でも彼が決して強烈な孤独感を感じさせる状況に置かれてはいないことを示している。この箇所についてはサボーも注釈で同様の指摘を行い、「この一節は、ガウワーの置かれた状況と彼の想像の熱狂ぶりの馬鹿馬鹿しさを強調する役割を果たしている」とし、「ガウワー氏は恐怖感のあまりに心ここにあらずの状態となっている」(29)と説明している。まさにこの指摘の通りの効果を發揮している箇所と言うことができ、彼がいかにも勇ましく振る舞おうとも、本当のところは、臆病な人間であることがわかるようになっていく。

最後に、この作品における地名の使用について見ていきたい。タイトルにもなっているイヴリンこそ架空の村の名前であるが、作品の中には実在する場所として、サセックス州、カーライル、ワイト島、カルショット、ウェストゲイト・ビルディングズなどの数箇所が出てくる。これらについても、実在する地名を使っているのであれば、そこにはそれなりの意味が込められていると考えるべきであろう。イヴリンがサセックス州にあるとし、ガウワー氏の実家がスコットランドとのほぼ国境沿いの町であるカーライルと明記することで、ガウワー氏が非常に長い距離を移動してきたことが読者にもわかるようになっていく<sup>12)</sup>。あるいは、ガウワー氏の妹の婚約者はワイト島へ向かう途中で嵐のために難破して死んでしまったとされているが、ワイト島が有名なイギリス国内のリゾート地であり（語り手は「外国にある」と説明している、179）、イギリス本島から大して離れてもいないことなどを考え合わせると、そこへ向かう船が嵐で難破してしまったというのもやや大袈裟な説明のように聞こえてくる。また、ウェストゲイト・ビルディングズというバースの一地区の名前が、ウェップ家からのガウワー氏宛ての手紙に明記されていることから次のようなことがわかる。ガウワー氏に家を譲った後、ウェップ家はそこへ移り住むことになっ

たようであるが、ドゥーディーによると、そこは「バースにある、かなり最近に建てられた安普請の地区」(345)であるという。オースティン自身、父親を亡くしてからしばらくはバースの中を母姉と共に転々としているが、ウェストゲイト・ビルディングズに住んでいたこともあった。また、『説きふせられて』の主人公アン・エリオットの古い学友であるスミス夫人の住居としても使われ、ウェップ夫妻の住所がここになっているということは、要するに、イヴリンを出た彼らの生活がかつてのように豊かなものではなくなったことを暗に示す役割を果たしている。

この他にも、イヴリン村のパブの女主人であるウィリス夫人の素姓やガウワー氏がパブでビールを飲むことなど、指摘されなければ気がつきもしないし、また気がつかなければそれでも構わないような細かな点がこの作品にも多々ある。しかし、こうした点についてきちんと理解しながら読んでいけば、そういったことを知らないよりはずっと作品理解を深めることができることが、新しく添えられる注釈を丹念に読むことでよくわかってくる。オースティンの小説では、語り手が「この人物は～である」と読者に向かってはっきりと説明することは少なく、そういうことを敢えて行っている箇所については、むしろ他の箇所よりも慎重に読み込んでいくことを求められることが多い。オースティンの場合、会話、手紙、そして以上述べてきたような些細な事柄を積み重ねることによって、登場人物がどのような人間なのかを描いていき、読者は、それらを読み取っていくことが求められる。こうした特徴は後の有名な作品にも言えることであり、習作の段階で、オースティンがすでにそういう手法を理解し、使いこなす術を知っていたことが、「イヴリン」を読めばよくわかる。

#### 4

「イヴリン」という作品の特徴について、当時流行していた感傷小説やゴシック小説のパロディ、あるいは小道具として効果的に地名などを使用する巧みさなどについて見てきた。しかし、この作品が特にすぐれているのは、もっと他

のところにあるのではないだろうか。ジョン・ハルプリンはリッツの論を引きながら、「イヴリン」という作品の動力が「誤った、あるいは歪められた善意、きちんとした判断を伴わない善意」<sup>13)</sup>にあると指摘している。

「イヴリン」の作品としてのテーマについてまとめるに際して、パトリシア・メイヤー・スパックスは「ナルシシズムのプロット」<sup>14)</sup>という言葉を使っているが、物語は貪欲なまでに自己の欲望を追求していく主人公と、彼の欲求を叶えるためにはすべてを犠牲にして投げ出すウェッパ家の人たちが中心となる。ガウワー氏は、たまたま通りかかっただけのイヴリンの村が気に入る、この村に住みたいと思いついただけで、見も知らないウェッパ家へ押し掛けていく。そして、歓待されたのをいいことに、出されるものを次々と飲み食いするだけでなく、屋敷と地所さえも欲しがり、彼の欲求はさらにエスカレートし、長女のマライアや彼女に付属する持参金を含め、多額の金銭を手に入れることになる。しかも、ウェッパ家の方も、この突然の訪問客に対して警戒するどころか、「どうぞお受け取りください。私の力の及ぶ限りのすべてであなた様をおもてなししているということをどうかご理解ください」(177)と、夫婦ともに自ら進んで求められるもののすべてを喜んで差し出すのである。こうして、しばらくの間は、ウェッパ家の長女と結婚したガウワー氏はそれなりに幸せに暮らすものの、忘れていた自分の旅の本来の目的を果たすために出掛け、その間に妻を亡くしてしまう。しかし、妻を亡くしたことは彼に大きな影響を与えることもなく、葬儀の手配を済ませるとそのままさっさと実家へと帰ってしまい、そこでイヴリン村のパブの女主人であったウィリス夫人と再会するや求婚し、二人は結婚する。そして、ウェッパ家にそのことを手紙で知らせると、自分たちの娘を亡くしたにもかかわらず、かつての義理の息子に再婚祝いを三十ポンドも贈るのである(但し、先にも述べたように、マライアが亡くなって以降の展開は、直接はオースティンではなく、甥のジェイムズ・エドワードの筆によるものとされている)。繰り返されるのは、ガウワー氏が象徴する人間の貪欲さや欲望の限りなさであり、それとは対照的に、そういう貪欲な人間に付け込ま

れ、とことんまで零落していく側の姿がウェブ家を通して描かれている。オースティンは、こうしたテーマを正面から描くのではなく、物語を寓話仕立てにするなどの屈折した作品構成を用い、やや複雑に描き出していく。

オースティンの後年の代表作の書き出しは、一読したときよりも結末を知ってから読み直したときに、そこに込められた意味がよくわかることが多い。「イヴリン」の書き出しの一文、「サセックス州の奥まった地に、おそらくイヴリンと呼ばれている村があり、多分、そこはイングランド南部で最も美しい村のひとつです (“In a retired part of the County of Sussex there is a village (*for what I know to the Contrary*) called Evelyn, *perhaps* one of the most beautiful Pots in the south of England.”)」（傍点・イタリック筆者、175）についても同様のことが言える。語り手はここでは決してイヴリンが理想的な村であるとは断定しておらず、これは次のような『エマ (Emma)』の有名な書き出しの一文と同じような効果を持っている。

エマ・ウッドハウスは、美しく、聡明で、裕福であり、心地よい家庭で育ち、朗らかな性格であったこともあり、あらゆる存在の恵みを最良のいくつかを一身に集めたように思われていた。そして、これまでの二十一年間を不幸や悩みごとなどほとんど持つこともなく過ごしてきたのだった。 (“Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition, *seemed to unite* some of the best blessings of existence ; and had lived nearly twenty-one years in the world with very little to distress or vex her.”) (傍点・イタリック筆者)<sup>15)</sup>

『エマ』のこの書き出しの部分で鍵となるのは引用の傍点部分（原文ではイタリック体）で、ここが単なる肯定文「集めており (“united”）」ではなく、わざわざ「集めていたように思われていた (“seemed to unite”）」とされていることで、これから先に主人公のエマの生活に何か波瀾の起きることが暗示されて

いることはしばしば指摘されてきた。初めて作品を読んだときには、もしかしたら気づかずに読み落としてしまうかもしれないが、作品を再読した読者には、この一文の意味するところがきちんと読み取ることができるようになっていく。このように、オースティンの作品における書き出しの部分は見かけ以上の意味を持っていることが多く、注意深く読んでいくことが必要である。

『エマ』の書き出しが持っているほどではないにしても、「イヴリン」についても同様のことが言えるのではないだろうか。この作品の書き出しを読んだときに、「おそらく」とか「多分」といった断定を避けるような表現がわざわざ使われていることに初めは気をとめなかったにしても、結末まで読み終えてから書き出しに戻ってみれば、書き出しの一文のこの曖昧な二つの表現が生きていることがわかるようになっていく。さらに、作品の冒頭で舞台についての説明を曖昧にしておくことで、この物語がいわゆるリアリズムの物語ではなく、登場人物などを極端に類型化した寓話的な物語であることを感じさせる効果を与えることに成功している。そんな舞台を背景にすれば、相当におかしな存在であるはずの登場人物たち、例えば、自分の欲求にだけ忠実に次々と要求をエスカレートさせていくガウワー氏やそれに異を唱えることなくすべてに応えようとするウェブ家などが特に不自然な存在ではないように読者には見えてくるのである。しかし、この作品からは、ここまで極端でないにしても、現実の人間の社会の中で似たような人間関係が営まれているという事実をも思い出させる。極端に自己中心的な人間というものはいつどの時代にもどこにでも存在しているであろうし、反対に、いかなる困難に対しても、まるでそれが自分たちの果たすべき義務であるとも考えているかのようになり、文句も言わずに粛々と受け入れていくような人たちも存在する。「イヴリン」の物語は確かに極端に寓話化されたものではあるが、それでもなお、人間の奥底にあるエゴイズムやそれによって搾取される犠牲者の関係について非常にリアリスティックに描かれた作品であることがわかる。

しかしながら、それでもまだ、「イヴリン」の物語についてすべてを語った

ようには思えない。この物語には、これまでの指摘には収まらない奥行きがあるように思われて仕方がない。さり気なくではあるものの、もっと人間の本質的な側面について踏み込んでいるように読むことはできないだろうか。作品の冒頭で、ウィリス夫人はイヴリンについて「土地柄も良いし、空気も澄んでいるし、ここには貧しさも悪い病気もなく、悪事を企むような人間もいない」(176)と説明している。この一文には、再読した際には、最初に読んだ時には気づかない、もっと深い意味を読み取ることはできないだろうか。

確かに、彼女が指摘するように、この物語には表面的には悪党は出て来ない。たとえウェブ家が貧しくなっていく、その原因がガウワー氏といういわば外部からの侵入者であったとしても、彼に悪意がないのは明らかで、何か違法な手段で一家に犠牲を強いているわけでもない。しかし、この点にこそ、この作品の持つ重みがあるのではないだろうか。悪意もないのに他人を不幸へと追い込んでいくことの恐ろしさが、ここでは描かれているのである。それが悪意を伴うものであるならば、ある意味では、その悪意の部分さえ取り除けば問題は解決する。しかし、悪意なく行われる事柄については、それを表立って排除することが難しいだけによりタチが悪い。しかし、この世の中には、こういうタチの悪さは必ず存在する。こんな点を見抜き、それを作品の中に取り込んでいくオースティンの人間観察の鋭さを、この作品からも改めて見出すことができるだろう。

## 5

最後に、「イヴリン」という作品が、小説の構成の面においても効果的に工夫されていることについて触れておきたい。それは、次のような、語り手の位置の問題である。

「イヴリン」の語り手は中立な風を装いながら物語を語り続けるが、次のような一文に行き当たったとき、物語の枠組みがはっきりと浮き上がってくる。ガウワー氏が——館を訪問している最中のことだが、「…あまりの怒りで頭が

熱くなっていたため、他の時なら彼を震えあがらせたであろうほどに遅い時間になっていることを忘れており、そしてそこに居合わせた人たちの意見では、あの人は頭がおかしいのだろうということで全員が一致したままとなったのです」(傍点筆者、182)というのがその箇所である。ここで、語り手の他にも、第三者的にガウワー氏を観察する立場の人物(「そこに居合わせた人たち」)を設定し、彼らに「あの人は頭がおかしいのだろう」という感想を漏らさせることが大きな効果を持っている。それは、読者はここまでは語り手の語る世界の価値観に接近していたはずであるが、この一文を読むことで、改めて常識的な判断へと引き戻されることになるからだ。つまり、この一文があることによって、ガウワー氏的な価値観が正当化される世界の欺瞞性を再確認させられ、語り手や主人公に同情的になることで読者の判断が誤った方向に引きずられることが確実になくなるようにしているのである。

これは習作期のオースティンの作品の中でも、特に類型化された登場人物を使って誇張された喜劇的な作品の中でしばしば使われている手法である。例えば、『愛と友情 (*Love and Friendship*)』も感傷小説への批判の作品であるが、この作品は、物語のほとんどをローラという感傷過多の登場人物が書く手紙によって語られる書簡体小説である。書簡体という形式を用いたことで、物語そのものが主人公のローラ本人が書く手紙によって語られることになれば、物語は彼女の書く文章だけを通して知られることとなり、読者が書き手の価値観に限りなく同情的になってしまうこともあり得る。そうなってしまうと、この作品のように何かのパロディを主目的とする作品の場合には、作者の批判の矛先を鈍らせることにもなりかねない。しかし、この作品においては、そういった事態を防ぐために、イザベラという主人公とは対極的なとても現実的な人物を配すことで、ローラの価値観が常識を逸脱したおかしなものであることが確認される仕組みになっている<sup>10)</sup>。「イヴリン」においては、先の一文がこの役割を果たしていることになる。この一文が挿入されていることによって、読者がガウワー氏という人物の非常識さを見落とす危険性はより少なくなるのだ。

「イヴリン」という作品は、一読しただけでは取るに足らない若書きの喜劇的な物語のように読めてしまうが、これまでに論じてきたような点を考えていくと、もっと深みを持った、考えるべきことの多い作品であることがわかってくる。その点において、「最初に一読したときよりはもっと複雑なものである」<sup>17)</sup>とこの作品について書いたリッツはさすがに炯眼であったと言えよう。

### 注

- 1) この作品のテキストには次のものを使用した。Jane Austen, *Catharine and Other Writings*, ed., Margaret Anne Doody and Douglas Murray, the World's Classics (Oxford: Oxford UP, 1993). 引用の末尾に付した数字はこのテキストでの頁数を示す。引用の訳文には、都留信夫監訳、『サンディトン——ジェイン・オースティン作品集——』（東京：鷹書房弓プレス・1997年）所収の拙訳「イヴリン」を使用した。
- 2) ポール・ポプラウスキー、『ジェイン・オースティン事典』, 向井秀忠監訳（東京：鷹書房弓プレス・2002年）p. 192.
- 3) オースティンの習作期の作品とその執筆時期は次のように考えられている。1787年から1790年にかけては『第一巻』に収められている小品群が、また1790年には『第二巻』収録の「愛と友情（“Love and Friendship”）」が書かれている。1791年には『第二巻』に収められている「イングランドの歴史（“The History of England”）」と「手紙あれこれ（“Collection of Letters”）」が、1792年には、『第二巻』の「レスリー城（“Lesley Castle”）」、『第一巻』の「三姉妹（“The Three Sisters”）」、そして『第三巻』の「イヴリン」と「キャサリン」が書かれたとされている。オースティンの習作期が終わるとされる翌年の1793年には断片的なものが三つ書かれているに過ぎないことを考えると、「イヴリン」は習作期の最終の時期に書かれた作品ということになる。B. C. Southam, *Jane Austen's Literary Manuscripts: A Study of the Novelist's Development through the Surviving Papers* (1964, rpt., London: The Athlone Press, 2001) p. 16.
- 4) 甥のジェイムズ・エドワード・オースティンによる結末は現在のどのテキストでも読むことができる。マライアとの結婚などがすべて夢であったとするもうひとつの結末を持つ姪のアナによるものは、次のもので読むことができる。Peter Sabor, ed., *Jane Austen's Evelyn*, ed. Sabor and others (Edmonton: Juvenilia Press, 1999) 所収の “Appendix: Anna Lefroy's Continuation of Evelyn”, pp. 20-23. サボーによる注釈はこのテキストに添えられたもので、引用後の数字はこのテキストの頁数を示す。
- 5) B. C. Southam, “Interpolations to Jane Austen's “Volume the Third”, *Notes and Queries*, Vol. 207 (May 1962) pp. 185-87.

- 6) Sabor, "Notes on the Text", *Jane Austen's Evelyn*, pp. xvi-xx.
- 7) Frances Beer, ed., *The Juvenilia of Jane Austen and Charlotte Brontë* (London: Penguin Books, 1986).
- 8) Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery* (Princeton: Princeton UP, 1952) pp. 20-21.
- 9) A. Walton Litz, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development* (New York: Oxford UP, 1965) p. 31.
- 10) Litz, p. 34.
- 11) 例えば、『マンスフィールド・パーク』において西インド諸島のアンティグアに言及されていることで、エドワード・サイードの『文化と帝国主義』に収められた『マンスフィールド・パーク』論が書かれ、この指摘が大きなきっかけとなってポスト植民地主義的な視点からオースティンの作品を読み直す動きが活発化していった。これは、作中におけるたったひとつの言及が彼女の作品の奥行きを深めていった好例と言えるであろう。同様に、『エマ』においても、エルトン夫人の出身地がプリストルと明確に示されていることで、彼女が奴隷貿易などの当時の社会状況に敏感であったことの理由が暗示されるなど、オースティンの作品においてはそういう例は枚挙に暇が無い。
- 12) サボアの編んだテキストには、ガウワー氏の移動の足跡を示した地図を載せているが、これを見ると、彼の行程がいかにかい長いものであるのかがよくわかる。Yan Kestens, p. xxi.
- 13) John Halperin, "Unengaged Laughter: Jane Austen's Juvenilia", J. David Grey, ed., *Jane Austen's Beginnings: The Juvenilia and Lady Susan* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1989) p. 129.
- 14) Patricia Meyer Spacks, "Plots and Possibilities: Jane Austen's Juvenilia", *Jane Austen's Beginnings*, p. 129.
- 15) Jane Austen, *Emma*, ed., James Kinsley, the World's Classics (Oxford: Oxford UP, 1998) p. 3.
- 16) 『愛と友情』のこの点については次のもので論じた。拙論『「愛と友情」試論——習作期のジェイン・オースティン(4)——』、『言語文化研究』第23巻第1号(松山大学学術研究会・2003年) pp. 1-18.
- 17) Litz, p. 31.

(附記)

本稿は、2003年度に交付を受けた松山大学総合研究所特別研究助成による研究成果の一部である。